

登山を終えて



ダウラギリI峰
遠征隊長 田中成幸

一昨年の一月、南東稜末端の
台地(四三〇〇m)より、私と宮
崎勉の二名はこの長大なルートの
偵察を行った。宮崎は末端コルか
ら上部の試登・私は東ダウラギリ
氷河のいろいろな角度からの写真
撮影、氷河左方からのルートの偵
察であった。

二カ月にあまるネパールでの政
治的な面で、一県単位の登山隊で
はたして実行できるか、出発まで
に許可はおりののだろうか。悩ま
は多かったが、がむしやに難関
に立ち向って一つ一つ切りくずし
ていくより方法はなかった。

出発ぎりぎりに間に合った登山
許可・全隊員でとび廻った資金集
め・物品販売など、苦しかった出
発までのことはカトマンズの空港
に立ったとき、すでに遠くに去り
これから始まるこの山とのたたか
いに、全隊員は闘志をむき出しに
していた。

B・Cでの安全登山祈願の儀式
も終えると、下部岩壁帯のルート
工作は、雨の中で行われた。
風の山の異名を持つこの山の天
候は悪く、過去いくつもの強力な
登山隊が敗退している。
硬い砂を氷河上に残したアイス
フォール地帯での下降では、アル
ミ下降器などは一日で使用出来な
くなるほど、摩耗がはげしかった。
氷河からの岩壁帯のルートは、

アップダウンが激しく、ゴジラの
背と私達が呼びならしたほどで、
今流のダイレクトに攀る登山とは
対称的に根負けしてしまいそうな
程、気の遠くなるような仕事であ
った。特にキャンプの建設にC3
よりC4間の一日・C4よりC
5間六日は、このルートの中で
最も難しく、一ヶ月を費した。
C4六五〇〇m以上の行動が三
日を超える高度との闘いは、い
くつもの登山隊を経験したサダー
ーのハクバ・テンジンも、今まで
残されていたこのルートの難しさ
をエベレスト以上と評価した。
十月一日・ファイナルキャン
プが建設され、翌一九日二時三
十五分・トランシーバーのかすかな
声が、宮崎・宇部・谷の三隊員が
八七六m強風の頂上に日の丸・
ネパール国旗・岳連旗を立てたと
伝えてきた時は、私は目頭が熱く
なった。私たちだけでなく全隊員
いやシエルバも、この計画にたづ
さわった者は皆、涙したのではな
いか。

思えば四年の年月をかけ、一万
メートルのフィックスロープを使
い果し、四人の仲間を失って勝ち
とったこの山の登頂であった。

登山活動を終えての帰途、キャ
ラバンは辛かった。つい先日まで
寝起きを共にし、いっしょに飯を
食い、酒を飲んだ四人の仲間が、
目の前から一瞬のうちに消えてし
まった。

阿久澤・小林・深澤の遭難のあと
は、彼等のためにも全員で頑張
ったのだったが、続く副隊長小暮

の死は、その時まで張りつめて耐
えていた隊員の心をボロボロにし
てしまった。登頂の目的を果して
の帰路、何につけても四人のこと
が思い出され、辛い思いをしたも
のだった。カトマンズでの残され
た仕事やネパール観光省へ提出す
るレポートの作成など、残務整理
にとびまわりながら、帰国して遺
族の方々に報告するまではなんと
か、気を張る日々であった。

今回の登山で、事故による死者
を出したのちも、登山を続行した
ことを一部で非難されているよう
だが、その時、全隊員の気持が一
直線に頂上に向っていったし、逝
つた仲間のためにも、この山の頂上
を踏もうとちかった。その燃える
思いを消すことは誰にもできなか
ったし、また登頂を信じられたか
ら続行を決意したのである。

中止したからといって、死者を
なぐさめることができるか、遺族
の悲しみがやわらぐか。
四人の冥福を祈るためにも、共
にめざした目的を果すことが最良
の道と思えたのである。

そして登頂の夢を果した。
四人の仲間の安らかなぬむりを
神に祈る。

事務局からお願い
五三年度の会費未納の会は至急
納入されるようお願いいたします。
なお、いちいち督促しておりま
せんが五三年度以前の会費未納の
会も若干あります。活動に支障を来
しますのでよろしくお願いします。

二月
指導員会臨時総会
(九日・於休協)
常任理事会
(一四日、於休協)
救助隊員(五四年度、推せ
んメ切(二〇日)
二月
国体選手強化合宿
(二四日、二五日於藤原)
国体選手強化合宿
(二〇日、二一日於黒岩)
高体連リーダー講習会
(二六日・二九日於尾瀬)
救助訓練
(期日・場所は未定)
常任理事会
(一四日、於休協)
四月
国体選手せんこう会
(期日・場所は未定)
全日本登山大会
(四月一九日・二二日於栃
木県日光連山)

領呂とは、万葉集の中に出てく
る言葉で、山々・峰々の意。
味で、呂は親愛・感動の念をこめ
て使う接尾語です。万葉集、上毛
野田の歌の中に、「久呂保の領呂」
(赤城山)とか、「伊香保の領呂」
(榛名山)などという風に使用され
ており、群馬岳連の会報の名にふ
さわしいものと思います。命名者
は浜名会長です。
久呂保の領呂は赤城山のことで、
黒々とした山頂付近の針葉樹が遠
望されるところから、また伊香保
の領呂は、いかつい大きな山々の
意で、ホは高くそびえている様子
を表わし、いづれも麗の人々が親
愛をこめて呼んでいたようです。

岳連の
行事予定

しめやかに

合同慰霊告別式行なわる

十一月二六日、午後一時より、知事、佐島上毛新聞社長、田中登前橋市営斎場において、ダウラギ山隊長の弔辞では、涙を新たにさしりI峰登山中遭難された、四名のせられました。

岳友の、合同慰霊告別式が、多くの山仲間や、知事を始めとする永遠の眠りについた、雄々しき岳各界の方々の参会を得て盛大、か友たちの霊の安らかならんことを祈る。参会された方達は、八百名つ、しめやかに行なわれました。

式は、導師に、祝島寺住職、過外一雄老師五名の僧侶による、読経のなか、全員の黙トウに始まり、濱名会長による式辞、また、清水

当日、故人をしのんで、しおり



「悲しい昇天」が配布されました。この告別式の準備のため、毎夜のごく遅くまで協力下さった準備委員の方々には大変、苦勞さまでした。

群馬岳連にとっては惜しい方々を失いました。岳連のリーダーとしても囑望されていた人々でした。

御冥福をお祈りいたします。

ダウラからの手紙

D I 峰登山隊

9月4日にC3が出来てから、ルートは南東稜下部の核心部の困難な箇所にしかりました。

通称ゴジラの背と呼んでいる、両側がすっぱり切れおちた岩稜を右側から巻いて、6200mのピークに続く急な雪稜に出て、9月

21日、ようやくC4が出来ました。

これから先は大体急なやや雪稜の稜線が続きますので、稀薄な空気が問題ですが、順調にキャンプがのびると思います。

天候の方も、C3以上は大体好天が多く、19日に大雪にみまわれた以外は、まずまずのところでした。

隊員の調子もまずまずで、シエルバが落石を受け、ヘルメットに穴があきました。ケガもなく、ほっとしました。

ベースキャンプとC1の間は、まだモンスーンの影響で雨が多く、完全に晴れた日は、1-2日しかありませんが、次第に西風が強くなり、好転しそうです。

野菜は、近くの村にネパール政府のバイロットファームがあり、ビニールハウスでの、キャベツや

故小暮勝義 境町山の会

昭和 一八八三年三月一日生

故阿久澤廣 群馬登高会

昭和 一八八五年五月三日生

故小林 清 群馬マヤマ山岳会

昭和 二四年二月九日生

故深澤勇二 大間山岳会

昭和 二四年二月三日生

御冥福をお祈りいたします。

(P150m)の先の6ピッチ・6750mピークにいたる全域に表層雪崩の跡がみとめられ、その6ピッチの手前4ピッチのスノーバー

ーは、全部抜け、先端一本が生きており、その先の2ピッチは、南壁側にたれ下っており、先端は切れ落ちておりました。

その後、24・25日とC3に居た、八木原・山田・千木良・真下・福田とシエルバ8名で現場附近と、C3からのトラバース、ブリズム捜索をやりましたがはつきりした手がかりは、見つかりませんでした。

C3からのトラバース、ブリズム捜索をやりましたがはつきりした手がかりは、見つかりませんでした。雪面の下に垂直の岩帯が続き、上方からの下降は不可能な様です。下方からは雪崩の通路で接近できそうもありません。

25日夜、全員で協議した結果、私がカトマンズに報告に行き、ヘリコプターで飛べたらその地点を飛ばすという点なので、ジヨムソからボカラ、そしてカトマンズへ帰って来て、ランジャン氏に相談しましたが、ヘリは4000mくらいがやっとで、落ちた地点は5000m以上あるから無理とのこと、29日には、飛行機のチャーターの交渉に行く予定です。

(9月29日発送) 10月1日夜、ランジャン氏にTELがあり、ネパール政府のジェット、ヘリが飛んでくれることになりました。

10月2日朝、フライトするといふこと、飛行士もインド人のベチランと云う人を用意してくれ、初めての、5000mにいんどで見るといふことになりました。

2日6時にヘリに乗り、8時45分BC着、機体を軽くするためあらゆる荷物を下し、南東稜のコーラ南壁側に入りました。何回かのせんの末、5500mの高さに達しました。天候は快晴でしたが、前日々に降ったと思はれる雪のため落ちたと思はれる地点(南壁側の5000mより6000mのアイス・ホール上部)は新雪のため何も発見できず、手がかりはえられませんでした。3回せん回し現場の写真をとるのみにしてしまいました。飛行士もこれ以上の飛行は危険と云うので、BCにもどりまし。実行委員会他、皆々様に申し訳ありません。 田中成幸

一日も早く吉報を思っています。 関 章司

(10月15日発送一部省略) 二度目の事故の報告をしなればならなくなりました。

関係者、実行委員会の方々、遺族の方に申し訳なく思っております。 10月20日、小暮副隊長がC4より

C5へ、一人で食料を荷上げ中にC4よりフィックス・ロープの7本目を登高中、足を踏みはずして転落死亡したのと思われまし。

当日、C5にて休養していた、石川・阿部・金子は、14:00になってもC5に到着しない小暮の安否を気づかない、C4を呼び出すが出なかつた。

石川は、阿部・金子をC4まで下らせることにし、2名は、14:30頃出発した。16:30頃フィックスロープに下っている小暮を発見した。声をかけるが反応は全くなく、死亡していると判断してC4に下り連絡をとる。 17:00

10月21日遺体収容 八木原は、C6を早朝に出発しC5に下り、C5の宮崎・宇野・谷と合流して現場に向。

C4より阿部・金子が合流、7名にて収容作業を開始し、フィックスロープから遺体を収容、C4のテント内に安置した。 10月22日、昨夜BCまでの収容について検討を重ねたが不可能との判断に達し、C4横の小ピークに埋葬を済ませました。 田中成幸 (11月7日発送)

ダウラギリ一峰

登山隊行動経過

7月22日 先発隊(八木原・小林山田)が成田空港より出発。翌日ネパール入りをし、隊員の通関等の準備を行う。
7月29日 本隊の半分が、バキスタン航空で成田空港出発。
8月1日 田中隊長以下六名の本隊の残り半分が、ネパール入り。関Drは8月4日に到着。
シエルバは、ラクバ・テンジン他が決定する。
8月8日 カトマンズを出てボカラへ、隊貨は大型トラックで、隊員と、リエゾン・オフィサー・シエルバは大型バスで出発。
8月10日 先発隊(小暮・宮崎・深沢)の三名と、シエルバは、十名のポーターを伴い、BCへ向けて出発。
8月11日 本隊がボカラを出発。ポーター二〇一名。
8月22日 BCに全隊員が集結。BCは、4200m。
16日 先発隊
18日 本隊
22日 荷運び隊
8月26日 C1を東ダウラギリ永河上 4850mに建設。
8月30日 C2を南東へ向う尾根上のニードル下 5400mに建設する。
9月4日 仮C3建設 5750m
9月9日 C3建設 5850m
ゴジラの背状の岩の多い尾根は困難で長い、キャンプを移す。
9月21日 C4建設 6450m
ゴジラの背の突破に手間取り、日数がかかったが、背より雪壁となり、その上の肩へ建設。
9月23日 C4・C5へのルート工作(阿久沢・深沢・小林)が夜になってもC4に帰らず。
石川・バーター・C4入り。
9月24日 石川・バーターの鈴木はバーターに連絡用の、トランシーバーが無い、C3に連絡に下る。石川・宇部の二名は上部へ捜索に行き、6750m地点の南壁側へ切れ落ちていたフイックス・ロープを発見するも三隊員の姿を発見出来なかった。全員の協議により、登山続行を決定する。
9月28日 田中隊長は、ジョムソンより飛行機にてカトマンズまで行き、関係官庁及び事務局に報告を行う。
尚ヘリコプターによる捜索について交渉を行なう。
10月2日 田中隊長、ヘリコプターにて高度5500m位まで飛び、空から南壁側を捜索するも見掛けなし。
10月7日 C5建設 6850m
10月14日 C6建設 7450m
ここからのルート工作には睡眠用の酸素を使用する。

国体委員会(長野)報告

10月18日 C7(アタックキャンプ)建設 7800m。
10月19日 第一次登頂成功。
宮崎・宇部・谷の三名は行動中も酸素を使い強風の中、登頂。
10月20日 C5へ単独で荷上げに向った。小暮副隊長が、6500m付近で、南壁側に転落死亡。
10月21日 小暮副隊長の遺体をC4に収容安置する。
第二次登頂成功。
山田・鈴木・シエルバの三名は天候に恵まれ、登頂に成功。
シエルバは、ナフヨンデル。
10月22日 小暮副隊長をC4横の小ピークに埋葬する。
10月24日 全隊員がBCに集結。追
11月21日 残隊員帰国。
悼と成功のバーターを行う。
10月25日 八木原は、ジョムソンよりカトマンズへ事故の報告と登頂の報告に下り、本隊もカリカンキ吉いの、チャタンまで下る。
10月27日 事務局及び関係官庁へ事故と登頂の報告。
11月3日 本隊がカトマンズに帰着する。
11月17日 日本大使館より死亡証明書等の書類を受取る。
仏寺、スワンプナートで、葬儀を行う。
11月20日 田中隊長以下五名が、四隊員の遺棄と共に帰国する。
別)得点・ブロック大会得点の合計となり全種に優勝すると、合計19点となる。
三、資料の配布について
大会資料の配布は、できるだけ早く送付されたい。大会当日の配布では役にたかない。
競技上のトラブルについて
一、開始式に補欠選手が参加したルールには選手三名と決められているので違反ではないが、二、スタート地点に補欠選手がいたが、コース付近に選手以外の者がいたのは違反ではないか。などについて監督から抗議が出された。これについては、日山協国会員会でも意見の相異が見られ混乱したが、違反とは扱わないことと解決された。
二、点数制への移行
点数は、総合点・競技別(種目

岳界通信

救助隊秋季訓練

九月三日、谷川岳の倉沢衝立前沢出合に於て、チロリアンブリッジによる谷底からの救助法の訓練が行なわれました。
内容は両岸にワイヤーロープを張り渡し固定し、もう一本のワイヤーで確保された救助者が遭難者の真上まで行き停止後、遭難者の居る場所まで空中30mぐらいを下降し、遭難現場へ着き、遭難者をウインチによりメインワイヤーまで巻き上げ、メインワイヤーに固定し、収容するという方法で行なわれました。
隊員が交替で救助者、遭難者になり、何回も熱心に行なわれまし

冬山合宿検討会

チャーター料金は、時間単価三〇万円/四五万円、機種により料金が異なっておりますが、前記の料金は、人間を救助できる機能を有するヘリコプターの料金です。なお、チャーターの依頼については、個人では依頼しないで、団体(会長名)で依頼する。地元警察に要請して依頼する。(遭対部)
冬山合宿報告会
遭対部主催による冬山合宿報告会が、一月二日(月)、群馬県協会で開催されました。出席団体は九団体で、計画、行動、装備などの良かった事項、悪かった事項等が発表され、これに対する質問やアドバイスの意見が出されました。特に話題となったのは装備関係で、今後注目されるゴアテックス製品は好評だったようです。取扱注意点としては、テントについては一酸化炭素中毒にかかり易いため、換気に特に注意すること。コンロでは、ピークワンが不調だったとの意見もあったが、取り扱い方にも問題があるとの意見も出されました。
その他として、ゲータレード(飲料)、火のいらないカイロが好評だったようです。最後に遭対部長から、正月合宿は、全国的に雪が少なかったこと。天候が良かったこと、遭難事故がなかったこと、今後、新人訓練等による技術向上、無理のない計画、普段の体力トレーニングにより事故のないようにはやっていた方がいいと言葉があり閉会しました。

で注意しなくてはならない。
この問題はこれですべて解決し、と判断できない、山岳競技のルールは厳しすぎて、参加する楽しさなどいじめるのは残念である。チームプレーなのだから、補欠を認めるとか、監督と選手の交流を増すとか、自由時間を大巾に増すとかの対策を講じることができないものなのか。
長野国体は、完全実施の初のケースであったが、競技役員総数四百数十名、長野県連二六〇名の陣容であり、58団体がいやられる。(文責 川辺柳一)
九月三日、谷川岳の倉沢衝立前沢出合に於て、チロリアンブリッジによる谷底からの救助法の訓練が行なわれました。
内容は両岸にワイヤーロープを張り渡し固定し、もう一本のワイヤーで確保された救助者が遭難者の真上まで行き停止後、遭難者の居る場所まで空中30mぐらいを下降し、遭難現場へ着き、遭難者をウインチによりメインワイヤーまで巻き上げ、メインワイヤーに固定し、収容するという方法で行なわれました。
隊員が交替で救助者、遭難者になり、何回も熱心に行なわれまし